

シェイクスピア作品に現われたShallとWillの考究

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 室蘭工業大學
	公開日: 2014-05-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 増田, 貢
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3001

シェイクスピア作品に現われた Shall と Will の考究

增 田 貢

An Enquiry into the Use of "Shall" and "Will" in Shakespeare's Works

Mitsugu Masuda

Abstract

As for the use of shall and will, this paper gives a treatment of some important points of difference between Shakespeare's English and Present One. The present author aims to remind students of English of the fact that Shakespeare's general application of these auxiliaries denoting pure future accidentally coincides with their present-day volitional use denoting speakers' will in Present English.

1500年から現代までの英語は總稱的に近代英語(Modern English 1500-1900)となつているが、これを二分すると前期近代英語(Early Modern English 1500-1650),後期近代英語(Late Modern English 1650-1900),および現代英語(Present English 1900-)となる。シェイクスピア(1564-1616)はエリザベス朝の人であるから、おのずから彼の用いた英語は前期近代英語に屬する。シェイクスピアの作品のみならず、欽定譯聖書などもみなこれに屬する、換言すればエリザベス朝英語(Elizabethan English 1558-1603)で書かれたものである。ところが當時は Chaucer(?1340-1400)の英語が次第に標準英語の土台とはなつたというものの、その後年月もあまりたつておらないので、近代英語といつてもその前期のものは語學的にみて確立してはいなかつた。したがつて現代英語と比較すると音聲、綴字、語法、意義その他において相當の相違が見られる。本論文において筆者は現代英語の用法からみて、シェイクスピアが未來助動詞の shall および willをいかに用いているかをその作品を通して結論を與えようとするものである。(譯文は坪內博士のそれによつた)

1. 純粹未來を表わすために二人稱および三人稱に shall を用いること。

She gives it out that you *shall* marry her. (是非, 夫婦になるんだと言つて

た。) Oth., IV, 1.

Our feast *shall* be much honoured in your presence. (わたしら祝宴が更に光 榮を加える譯になる,君らの結婚式を兼ることが出來れば。) Merch. of Ven., III, 2. Of all days in the year,

Come Lammas-eve at night shall she be eighteen.

(初穂節の夜になれば、ちょうどお十八にならつしやります。) Rom. and Jul. I, 3. "Shall she marry him?" — "No." — "How then? shall he marry her?" (「あの嬢さんがお嫁さんになるのか?」「いんにや。」「じや、どうなんだ? 旦那が お智さんになるのか?」)

Two Gent., II, 5.

この用法はシェイクスピアの作品を觀察的に讀むばあい、しばしば注意をひく用法である。これはあらゆる人稱に shall を用いて純粹未來を表わす古代用法の遺物と見なすことができる。

2. 條件法の助動詞として would を用うべきところに should を用いること。

Thou shouldst have better pleased me with this deed,

Hadst thou descended from another house.

(きょうの働きでもしお前が他の血統の者であつたら、滿足にも思つたろうが。)

As you like it, I, 2.

If he should offer to choose, and choose the right casket, you should refuse to perform your father's will, if you should refuse to accept him. (でもあの方が選ぼうとおつしやつて萬一正しい箱をおあてなさいましたなら、その時にやだとおつしやつては、お父様の御遺言にお背き遊ばすことになりましよう。)

Merch, of Ven. I. 2.

1 find thee apt;

And duller shouldst thou be than the fat weed

That roots itself in ease on Lethe wharf,

Wouldst thou not stir in this.

(たのもしげなその言葉。 かく聞きてだに感動せざるようならば、 物忘れ川に生い朽 つるちよう盆なき草の鈍きに劣らん。) Haml., I, 5.

ところが同じような場合に should を用いないで現代 英語 におけると同じく would を用いている例がある これはシェイクスピアの用いる語法の不定性を表わすものである。たとえば:--

Had I but served my God with half the zeal I served my king,

He would not in mine age

Have left me naked to mine enemies.

(もしわしが王に仕えたその半分だけの熱誠を以て神にお仕えしていたのであつたら、神はよもやこう年老いた今となつて、わしを裸身で敵中へお見放しになるようなことはなかつたろう。) Henry VIII, III, 2.

"A friendly eye could never see such faults."——"A flatterer's would not, though they do appear

As huge as high Olympus."

(「親友は決してそういう過失なんか見つけ得ないはずだ。「へつらい者ならわざと見んようにするであろう、オリンパスほどの大きな過失をも。」 Jul. Cæs., IV, 3.

- 3. 別の意義を有する他語に言い換えられる shall の純粹未來的用法。
- (a) 「必然」を表わす用法。

If you much note him,

you shall offend him.

(あんまり皆さんがお目をおつけですと、なおと氣嫌がわるくなります。)

Macb., III, 4.

Our son shall win. (ハムレットが勝うたぞよ。)

Haml., V, 2.

Let good Antonio look he keep his day,

Or he shall pay for this.

(アントーニオーさんに注意して約束の期限を間違えさせないようにしないと、この 八當りで、とんでもない目に逢いなさるだろうよ。) Merch. of Ven., II, 8.

(b) 命令または要求の實行承諾を表わす will の代用。

"Collect them all together at my tent: I'll before thee "——"I shall do't, my lord," (「彼等一同をわしのテントへ集らせてください, おまいより 先 きに歸るから。」「かしてまりました。」) Henry V, IV, 1.

"Go forth, Agrippa, and begin the fight:

Our will is Antony be took alive;

Make it so known. "---"Cæsar, I shall."

 $(\lceil r / r / r)$ ツパ進軍して、すぐに戰いを始めい。わしはアントニーを生捕にしたいのじや。」 (r / r / r) (r / r / r) (r / r / r) (r / r / r) (r / r / r) (r /

"Brothers both,

Commend me to the princes in our camp;

Do my good morrow to them, and anon

Desire them all to my pavilion." — "We shall, my liege."

(「弟たち、わが陣中の諸公へ朝見舞をして、わしがよろしく言つたと傳えて、それからすぐ揃つて、わしの帷幄へ來いと言つてください。,——「承知いたしました。」)

Henry V, IV, 1.

自分のことを第三人稱でいう場合にも同じく shall を用いている。

"Effect it with some care that he may prove

More fond on her than she upon her love:

And look thou meet me ere the first cock crow."-

"Fear not, my lord, your servant shall do so."

(「いいか、よく注意して女よりも男の方がずつと夢中になるような。そして一番鶏の鳴く前に俺の許へ戻つて來るんだ。」――「お氣づかいなさいますな。きつとうまく爲おわせます。」) Mids., II, 1.

(c) ある行為や狀態がよく起ることを表わす will の代用。

Look, what is done cannot be now amended:

Men shall deal unadvisedly sometimes,

Which after hours give leisure to repent.

(だつて、爲てしまつたことは仕方がない。 人間は往々無分別な事をするが、後に至ると悔むのです。) Rich. III, IV, 4.

You shall mark

Many a duteous and knee-crooking knave,

That, doting on his own obsequious bondage,

Wears out his time, much like his master's ass,

For nought but provender, and when he's old, cashier'd.

(隨分世間には膝をひよこつかせて忠義 三昧をする馬鹿正直な奴等もある、そいつらは主のろ馬も同様に柔順くくびきを掛けられて飼料だけ貰つて滿足して、ぼけるまで働いてから追い出される。) Othello, I, 1

To see, now, how a jet shall come about!

(冗談が今となつてほんとの事になつたと思うと!) Rom. and Jul., I, 3.

よく起るということはある條件を滿たさなければ、ある行為や狀態を起せないという概念と結ぶことがある。たとえば: ---

A dog of that house shall move me to stand.

(はて、飼犬を見ただけでも向うてゆくわい。)

Rom. and Jul., I, 1.

現代英語の慣用と同じくシェイクスピアは頻發と意志の兩概念を含ませて will を用いている。

What great ones do the less will prattle of.

(とかく大身のなさることは下の者共がいろいろ噂をするものだから。)

Twelfth Night, I, 2.

Foul deeds will rise,

Though all the earth o'erwhelm them, to men's eyes.

(悪事はやがて露われようぞ,たとい大地が人の目を遮るとも。)

Haml., I, 2

(d) 叙述に對する話者の心的態度を示すいわゆる法助動詞(modal auxiliary)としてのmay の代用。とくに關係代名詞 as もしくは what のつぎに用いられる。

You can play no part but Pyramus; for Pyramus is a sweet-faced man; a proper man, as one *shall* see in a summer's day.

(お前さんはピラマスしか演られねえだよ。 ピラマスはお前さん, 綺麗な顔の人だに 立派な人だに, 夏の日永にでも見ていたい人だに。) Mids-Night's Dream, I,2.

Be merry, and employ your chiefest thoughts

To courtship and such fair ostents of love

As shall conveniently become you there.

(心を思いきり愉快に持つて、ひとえに先方の氣に入るよう、また貴下の眞情をその場合に應じて最も都合よく發表するようにお力めなさるがいいつてね。)

Merch. of Ven., II, 8,

What Antony shall speak, I will protest

He speaks by leave and by permission.

(アント=-の弔辭は吾々が許してやらせるのだと言います。) Jul. Cæs., III, 1.

4. 未來時制または條件法の純助動詞として一人稱に will (would) を用いた例が多い。 Perhaps I will return immediately. (おれは多分直に戻つて來るだろう。)

Merch. of Ven., II, 5.

Perchance I will be there as soon as you.

(多分わたしはその頃までに歸りましよう。)

Com. of Er., IV, 1.

I would be loath to foil him. (負かしたかないだろうが。)

As you like it, I, 1.

I would have thought her spirit had been invincible against all assaults of affection. (わしはあの婦人ばかりは、どんな戀愛の襲撃を以てしても、難攻不落だと思つていたにねえ。) Much ado, II, 3.

5. 矛盾した文例も多いことは前述のとおりシェイクスピアの語法上の不定性を物語つている。 つぎの引用文において will および shall の助動詞が現代用法と正反對に彼は用いている。

I will sooner have a beard grow in the palm of my hand than he shall get one on his cheek, (あのあごひげが生えるようなら、おれのこの掌にも生える だろうつてくらいのものだ。) Henry IV, B, I, 2.

結語としてシェイクスピアの未來助動詞 shall および will の用法はもちろん彼の 氣まぐれな使い方も多く見られるが、大体現代英語の正反對をゆくものと考えて差支えないように思う。すなわち純粹未來のこれらの用法を對照してみるとつぎのようになる。

現 八 英 商			シエイク	シェイクスピアの英語		
I shall	we	shall	I will	we	will	
you will	you	will	you shall			
he she will it	they	will	the she shall it	they	shall	

以上から推論して注目すべきことはシェイクスピアの shall, will の用法は現代英語の話者の意志 (speakers' will) を表わす 用法 と その軌を一にしているということがいえる。前期近代英語を代表するシェイクスピアのこの未來助動詞の慣用から四百年を經過した現代英語の用法、それから今後現にアメリカにおいてその傾向が見えているとおり、 will に統一されそうなきざしがあることを考えて英語の變遷に思いをいたすのである。

〔文 献〕

Jespersen: Modern English Grammar

" : Essentials of English Grammar

Poutsma: Grammar of Late Modern English

Onions: Advanced English Syntax

Schmidt: Shakespeare-Lexicon

Sweet: A Short Historical English Grammar

大 塚 高 信 : シエイクスピア及聖書の英語

(昭和 26 年 11 月 10 日受付)